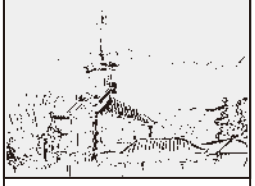
城北



平成28年9月1日現在	
総世帯数	3,532
総人口	7,679
男	3,667
女	4,012

地区発見 西町町会 閑静な住宅街

西町は松本城の北、一本の道路を挟んで整然と家が並ぶ町ですが、松本市の住居表示では、北深志2、北深志3、開智3、沢村1、沢村2が混在している町です。

「信府統記」には、安原町の西側にあり西町と名付けたとあります。当時は45戸で、徒士町の高橋家のような武家屋敷が整然と並んでいたものとみられますが、明治45年4月の大火で堂町、旗町などとともに類焼し、武家屋敷は跡形もなく消えてしまいました。

現在は、所々に武家屋敷跡を忍ばせるような広い空き地が残るだけとなっています。

文化村出現

大正時代の末、北よりの桑畑の真ん中に100坪ほどの広場を囲んで、今までの日本家屋とは全く違うガラス窓を多用した二階建ての7軒のモダンな家が出現し、人々は大正ロマンの文化村に驚いたということです。

平成の今では「文化村あり」の看板が立つのみとなっています。

単騎横断の福島安正大将

徒士町から西町へ50メートルほど入った左側に、小さな児童公園があります。

松本市では唯一陸軍大将になった福島安正の生家跡で、福島家から松本市に寄付されたものです。

福島は苦学して大学南校（東京大学の前身）を卒業し、陸軍省に入り、西南の役や日清・日露戦争などに従軍しました。

明治20年にドイツ公使館付きになった福島は、任期明けの明治25年2月にドイツ・ベルリンを出発し、極寒のウラル山脈やアルタイの山脈を越え、翌年6月にウラジオストックに到着しました。1万4千キロの単独行でした。

西町公園には、高さが3メートルを超す「福島大将誕生地」の石碑が建っています。

諜報もした河原操子先生

河原操子は、福島安正宅の向いの儒学者河原忠の長女として明治8年に生まれました。

小さいころから父の薫陶を受けて良く学び、東京女子高等師範学校に進みましたが、卒業直前に健康を害して退学しました。帰郷後当時の女子教育の第一人者と言われた下田歌子の推薦で、横浜の清国の文学校から上海の女学校の教師をしました。その後、内蒙古のカラチン王府から教育顧問として招請され、女学校を創設したり、教育に当たったりしました。

河原は異国での教育に情熱を傾けましたが、日露戦争後は教育顧問としての表の顔と軍事上の機密を調べる裏の顔を使い分け、諜報活動もしていたと述べています。

西町往来

西町は、戸数110戸、住民230人余りの小さな町ですが「地震・雷・火事・水害加えて防犯・詐欺注意」を合言葉に、お互いに信頼し合いながら町づくりを進めています。

平和を語る 疎開児童はつらい

七十一回目の終戦の日を前に八月九日「平和を語る会」が城北公民館で開かれ、小学二年生の時に浜松市から松本市に疎開した田町の浅輪孝行さんが当時の思い出を語りました。

浅輪さんは、昭和十八年に当時の国民学校に入学しましたが、すでに戦争一色でした。

浅輪さん一家は、一旦浜松市の郊外に疎開しましたが、より安全な場所へということから父の生まれ故郷の松本市へ再疎開することになり、父と姉を浜松に残し、母と二人の弟の四人で松本に行くことになりました。

松本までどのように来たのか覚えていないという浅輪さんですが、「母が大事にしている足踏みミシンの頭部分を背負った時の重さは肩に食い込んだ紐の痛さとともに今も記憶に残っている」と話していました。

編入した学校は、岡田国民学校で、登校した初日に先生から紹介されましたが、休み時間になってやって来たのは大柄なクラスのボスでした。

「おめェ、○○チに越してきたんだよなァ」「うん、仲良くしてネ」「ああ、オレの言うこと聞けばナ」実はこのボスこそこの六月に亡くなった中条繁君でした。彼は結構世話好きで浅輪さんがいじめにあった時などは「オレの子分だ」と言ってかばってくれました。

配給の食料は滞りがちで、桑畑を借りて作物をつくることになりましたが、深く根をはったトッコを取り除くのは二年生の身体には一苦労で、根性で取り除いた、ということです。そして、サツマイモやカボチャを作る一方トウモロコシやコウーリャンなどを粉にして饅頭を作り主食代わりにしました。空腹を紛らわせるのは、遊びしかありませんでした。太平洋戦争は三年生になった夏に終わりました。

浅輪さんは、「平和とは安心で安全に暮らすことです」と話を締めくくりました。

公民館講座　善光寺街道探訪

岡田宿から会田宿まで

8月26日、宮島武雄さん（沢村町会）の案内で善光寺街道を探訪しました。

参加者は9名でバスの中で「善光寺街道は、善光寺信仰の道として江戸時代は、特に人々の往来がはなやいだそうです。今回江戸時代の旅人の気分を味わえたら…」との講義を聞き、岡田宿を通り抜け、左馬飼峠、右刈谷原峠の分岐から歩き始めました。松尾芭蕉も貞享5年（1688年）更級の月を見るため8月11日美濃を立ち、15日姨捨で名月を鑑賞したと更級日記にしるされています。この日の暑さは異常でしたが、木陰は涼しく路傍に立つ石仏群がやさしく微笑み、参加者を江戸時代の旅人の気分にしてくれました。1時間ほどで峠の頂上に出ると、かつては3軒の茶屋があり井戸もあった広場で昼食をとり、長い下り坂を歩き、1時間ほどで宿場の面影が残る刈谷原宿に着きました。

再びバスに乗り会田宿の常夜燈、芭蕉の句碑をみながら信濃三十三札所の20番目の岩井堂に着きました。

観音堂の右手の崖に刻まれた、大きなお地蔵様の姿は圧倒されます。周りの石仏群も沢山あり信仰の深さが伺えました。近くの江戸時代から在る広田寺（こうでんじ）は真田氏の紋のある寺で、山門の両脇には100体の石仏があり静かなたたずまいの寺も見学してきました。松本にUターンして数年になる参加者の高橋陽子さん（蟻ヶ崎東）は「一人では行かれない贅沢な街道の旅ができた。またこのような企画をして欲しい」と言っていました。芭蕉が、良寛が、そして、子規が歩いた古の道を歩き豊かになれた旅でした。

文化部主催

真田氏の足跡を訪ねて

～上田・松代の旅

8月30日、台風接近の大雨の中30人が参加しました。講師はおなじみ後藤芳孝先生です。

上田城跡では天守はなく、高く盛られた土塁や整然と積まれた石垣から強固な城であったことがわかります。上田市立博物館を観た後、櫓に登るグループと大河ドラマ館に入るグループに分かれ見学しました。その後、昌幸が上田城を築城する前に居住していたという真田の里に行き真田氏歴史館を見学しました。

昼食をとった後、地蔵峠を越えて松代の真田宝物館に行きました。真田家伝来の大名道具や信之・信繁直筆の書状など貴重なお宝を見て、松代で栄えたもうひとつの真田があることを知りました。

すぐ裏の真田邸は新御殿とも呼ばれる立派なお屋敷で、9代藩主が建築しました。広く美しい庭園も必見です。

佐久間象山の意見を取り入れて幕末期に建てられたという文武学校は、藩士の子弟が学問と武芸を習っていました。柱とふすまで仕切られたたくさんの教室があり、独立して剣術所、柔術所、弓術所、槍術所などがあります。

真田家の足跡を駆け足でたどった盛りだくさんの一日でした。参加者の方からは「大河ドラマでやっていて真田をもっと知りたいと思い参加した。とっても勉強になりました」と感想が聞かれました。

いちごの風

▲ 沢村音頭お披露目

西町公園花植作業 ▼

▲ 公民館に泊まって遊ぼう

深志ヶ丘町会夏祭り ▼

▲ 蟻ヶ崎北町会防災訓練

沢村こども会トマト収穫 ▼

▼ 真田の足跡を訪ねて

▲ 北馬場七夕飾り

乗鞍三本滝 ▶